

倉重篤郎の サンデー 時評



no.42

まさに戦後政治の岐路

「70年談話」で平和攻勢を

安倍晋三首相の戦後70年談話に最も注目している国はどこか？中・韓ではない。米国である。何よりもレスポンス（反応）が速い。1月5日、伊勢神宮参拝後の記者会見で安倍氏が歴代内閣の立場を引き継ぐと発言すると、米國務省のサキ報道官がたちどころにその姿勢を評価するコメントを発表、村山、河野両談話を「謝罪」

だと位置づけたうえで「関係改善の大きな節目となった」と述べた。この「謝罪」との言及について、民主党の荒井聡衆院議員が興味深いエピソードを話してくれた。2013年夏、当時のルース駐日米大使との昼食会の席上でのことである。大使とは民主党政権時代から親交を深め、ある程度本音を言い合う関係になっていた。

だが位置づけたうえで「関係改善の大きな節目となった」と述べた。この「謝罪」との言及について、民主党の荒井聡衆院議員が興味深いエピソードを話してくれた。2013年夏、当時のルース駐日米大使との昼食会の席上でのことである。大使とは民主党政権時代から親交を深め、ある程度本音を言い合う関係になっていた。

「世界の近代史上における数々の植民地支配や侵略的行為に思いをいたし、わが国が過去に行ったこうした行為や他国民とくにアジアの諸国民に与えた苦痛を認識し、深い反省の念を表明する」
要は、植民地支配、侵略については、日本だけではなかったことを強調、「的行為」と婉曲化し、「謝罪」はしなかった。これでも、衆院で採択された時は欠席者が多数出て、賛成は230人と全衆院議員の過半数に届かず、かつ参院では議論もされなかったのだ。

サキ報道官やルース氏ではないが、この国会決議のままでは、日本側の加害認識が不明瞭で、かつ、米側が気になる「謝罪」問題もクリアできなかったであろう。それを変えたのが村山談話だった。国策の誤りにより戦争への道を歩んだ、と率直に認め、短くズバリ「侵略」と明言、「痛切な反省の意」に「心からのお詫びの気持ち」を付け加えた。『村山富市回顧録』（2012年、岩波書店）によると、村山氏は、相当な覚悟をもって談話作りに臨んでいたようだ。閣僚更迭なども念頭にあった。「約1年半の内閣で一番誇りに思っているのはこの談話か」との質問に「そうだな、やはりこの談話じゃな」と回顧している。

自社さ連立政権だったからこそ、村山氏が首相だったからこそ、成立した談話だった。もちろん、2カ月前の国会決議採択への努力と失敗もまた、その肥やしになっている。その前史もある。93年に首相になった細川護熙氏が就任直後の会見で「私自身は侵略戦争であった、間違った戦争であったと認識している」と明言、さらにはかのぼれば、中曽根康弘首相が一貫して「侵略」と国会答弁してきたことも忘れるべきではない。つまり、村山談話は戦後政治の必然と偶然と、国際協調外交を志した政治家たちのいくつかの踏み跡の上に生まれたものである。そしてこの20年間、日本政治がこの談話を外交ツールとして上手に使

いこなしてきたのも事実である。踏み込んで謝罪することで、腹を割った話し合いが始まるのだ。安倍談話は、この政治的果実を無にするべきではない。文言にこだわるのは細々したことではない。政治の本質にかかわる。この国会での安倍答弁は、その歴史認識が20年前の国会決議に後退したかのような印象を受け、不安である。談話は①過去の反省②戦後の歩みの総括③未来志向の生き様——の3部構成になるようだが、①は愚直に過去を踏襲すべきである。安倍カラーは、②③の分野で有識者たちの知恵を借りればよい。むしろ、①をさらに踏み込んでみてはいかだろうか。村山談話でも書き切れなかった「誤った国

策」の中身について具体的に言及するのである。謝罪にもっと気持ちを含めてもいい。このサプライズ効果はばかにならない。踏み込んだ反省があつてこそ、②と③が生きてくる。②と③が説得力を持つことによって外交の幅も広がっていく。米国に対しては、リビジオニストではないかとの疑念を払拭し、中・露に対しては、戦争勝利70周年の対日包囲網作りの虚を突き、韓国に対しては、慰安婦問題最終決着の糸口が見えてこよう。安倍談話は村山談話を上書きし、ここ10年、20年の日本の生き様に決定的な影響を与える。その意味では戦後政治の大きな岐路である。心して臨まん。ぜひ、平和攻勢のツールに高め上げてほしい。

新聞協会賞・菊池寛賞をダブル受賞!!

老いてはさまよう

認知症の人はいま

毎日新聞
特別報道グループ 編著

「太郎」という仮名のまま施設で暮らしていた男性の家族との劇的な再会、線路に迷い込み轢死した男性の家族にのしかかった巨額賠償請求……。大反響を呼んだ、さまざまな人間ドラマとともに、「認知症のいま」をあぶり出し、社会を動かした渾身のキャンペーンが一冊に。

978-4-620-32286-5

老いてはさまよう

認知症の人はいま



定価(本体1400円+税)

毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〈ホームページ〉http://books.mainichi.co.jp/

倉重篤郎（くらしげ・あつろう）1953年7月東京生まれ。78年東京大教育学部卒、毎日新聞入社、水戸、青森支局。政治部、経済部。2004年政治部長、11年論説委員長、13年専門編集委員。